



拾った
無知少女を騙して
性欲処理してもらう

女の子を拾った

名前はアウリ

彼女には出会った時以前の記憶がない
アウリと言うのは彼女が唯一覚えていた単語で
それを彼女の名という事にした

春の夜、もう何年も放置されたままの
不法投棄にあふれた空き地で彼女は
その場に似合わない身なりで佇み、空を眺めていた
まず何らかの企画を疑ったが、どうにも気になつて話しかけた
間くに、気づけばここにいて誰かを待っていると言う
懸念は残るがやはり気がかりだったので
来るであろうその誰かに気づいてもらえよう形跡を残した後
その晩は自宅に招き、泊まってもらった

翌日またその場を訪れたが誰かが来た様子は見られなかった

彼女の記憶喪失は家電等の設備に対する知識すら無く
一人で生活するのも困難に思える程だった
しかし物覚えや器量はよく、好奇心も旺盛で
なし崩しに同棲を始めて一か月が経つ頃には
家事もすっかり覚えて
我が家の食卓は随分と華やかになっていた

アウリと出会った場所を週に3回程

散歩がてら一緒に見回るが一向に変化はない
そのうち、歩きながら二人で会話をする時間になつていた

もしも何者かが現れて、それがアウリの待ち人だったら…

もしもアウリに過去の記憶が戻ったら…

そんな日が来なければいいと思つてしまう程
彼女に惹かれていた

それはもちろん性的な意味でも…



天気の良い日の昼過ぎ頃にはアウリはよく昼寝をしている
家の中なら場所を問わず寝るので何度か驚かされた
気を付けてはいるつもりだけど気が付けば寝ているらしい
そんな彼女に愛らしさを覚えていた、最初は…



ある日、床で倒れるように寝ていた彼女を抱き起し
ベッドまで運んだ時、その身体の柔らかさと程よい重み
腕に伝わる体温、立ち上ってくる異性の香りに心がざわついた
運ばれてる間に起きる様子もなく無防備にベッドに横たわるアウリ
理性が揺らぎ、それまでの彼女との思い出が裏返る……
見ないフリをしてきた性欲が目覚めます



ついに性欲に負けたその日、アウリはソファで寝ていた
恐る恐る膝に置いた手に力を込めて押せば
彼女が普段見せないような角度に脚が開いた
服の前掛けをずらすとそこでは
汚れの無い白いインナーがキュツと彼女の陰部を包んでいる
生睡を飲み込み、後の為に写真に収める…

スゥ…

その後、デザインの割に何故か隙の少ない胸元も
思い切りよく下げ、形の良い乳房を拝んだ
可愛らしい色の先端を指で転がすと
ほのかな張りを得て指の腹を押し返してくる
ズボンの中で、陰茎が痛いほど勃起した

は

あ…

ソファの上で彼女の重みを受け止めてたわむ尻と太もも
その上でぶつくりと存在を主張する土手
交尾の際に雄の硬さをしっかりと受け止められそうだ
「ん…」
内ももをなでるとくすぐったいのかかわいい声が漏れた
しっとり指に吸い付く肌はいつまでも撫でていたい

股に向け内ももを揉み解していくと
肌がじんわりと暖まりほのかに赤みがついた
腰を浮かせ股間がきゅっと持ち上がる
きつと気持ちいいんだ…
起きてたらどんな反応をするだろう…
今度マッサージと言ってそれとなく触ってみようか…
たぶん…疑いもしないだろう

「おお！」

つい声が漏れる
変形する白い包み
布でまとめ上げられているからか思ったより弾力があり
つまんだ指を動かせばぷるんと揺れる
美味しそうだ、唇でついばみたい

きゅん

いむ……

アウリの入口の両脇をつまみ、当たる部分のインナーを湿らせる
せっかく出来た彼女の染みはすぐにスツと消えた
外出時にも下着代わりに彼女が好んで着る不思議なインナー
洗っている所を、ましてや汚れている所を見た事がない
精液をかけてもバレないのだろうか…
例えばもしこの布越しに当てる射精したら…？

たまらず射精しそうになった
あらわになったアウリ
ほんの黒ずみも見られない驚くほどの新品…
こんな場所がこの世にまだあったのか
アウリに待たれてた誰かが怨めしい…
でも今、アウリはここにいます

繋がりたい…
でも流石にこれ以上は…いや
ここまででも充分危険を冒している…
繋がると思ったら準備が足りない
アウリの赤身をそっと撫でてさよならをする



アウリは相変わらずよく寝ている
乳首も性器も触れられた事を知らないまま
いったいどんな夢を見ているのだろう

左側に傾けられた彼女の身体
かつて一緒にソファに座っていた時
寝入った彼女にその体重を預けられた事がある
細い肩から伝わる暖かさ、小さな寝息
さらさらの髪が当たってくすぐったかった
それはもう幸せな時で…
やましい気持ちなど少しも無かった



今は彼女にちんぽを突き付けている
獣の臭いを放つ硬い熱の塊を……

彼女が目覚ましたら真ッ先に目に入る位置……

空気の動きや光の加減が目覚ます要因になるかもしれない
それでも危険を冒して彼女の目の前で性器を出すには意味がある

スツ

彼女の鼻が鳴る

続きアウリの胸が小刻みに揺れた

嗅がれた……雄の匂い……アウリに……

肩の力を抜き元の寝息に戻るアウリ、目は覚まさない

アウリのそばにいい、そう受け取った

雄としての自分を、無意識のアウリは警戒していない
射精したい……





しごく…
しごく…

マキングしたい…

この雌を…自分のものだ主張する為に…
自分のものだ主張する為にマキングする事を
彼女に受け入れてもらいたい…

フェッ

フェッ

今回は…精液はティッシュに出し
寝ているアウリに嗅がせるだけ…
熱とおいの刷り込みが目的…
急いではないがアウリをおかずにしている背徳感や
緊張感についつい手が早まる
アウリの前で揺れる亀頭
鈴口から漏れ出るカウパーが揺れ、宙を舞い
アウリの肌に落ちる
あ…ッ

「んん！」

アウリが首を小さく振り、瞼が小刻みに震える
大丈夫だ、まだ起きない
しかしアウリにカウパーが触れた事に対する興奮と
事態に驚いた拍子に陰茎をじごく手に力が入ったのがまずかった
柄陰部が持ち上がる感覚がある

ビク……

性器が射精のフェーズに入った

まずい
ティツシュが近場に無い
早くシコりたいばかりに後回しにしていた
出る前に取りに行けばいいと……
ちがうっこんなこと考えている場合じゃない
射精感こみあげてくるどうする????
この際左手で受け止め……



迫るタイムリミット、削がれた判断力の中
揺れる亀頭を見つめる目の端に、

アウリの可愛い唇が見えた

パンパンの亀頭が潤いに優しく受け止められる
「好きだっ…アウリっっっアウリっっっ…」
小さく開いた口に勢いよく精液を撃ちこむ
脚を開き、腰を突き出し、陰茎の先に向け
身体の全てを集めて放つような感覚で射精する
やってる…やってしまった…終わる…終わる…
出しきる…アウリっ…飲めっアウリっっ
アウリの唇が触れた亀頭が焼けるように熱い
生涯で最後の…最高の射精だと思った



アウリの喉が動く
精液が嚥下された…
自分の精液が…アウリの体内に…
唇から離れた亀頭が名残惜しそうに精液で細い橋を掛けていた

アウリは起きない

口内に射精されて…
それを飲み込んで尚…

やった…よし…良かった…危なかった…
ひとまずの危機は去った
素敵な経験と貴重なサンプルケースという大きな成果を得て…
駄目だ…ごめんアウリ…勃起治まらない…
これからの生活に邪な希望が見えて…
起きないなら今日の時点で思い切って下に流し込んでおけば…
夜…寝ている間に匂い堪能しつつ生抱き枕に…
我ながら酷い思考をしていると思った
口内射精がこんな成功さえしなげれば
幾分マシな人間でいられただろうに



アウリの瞼が大きく動く
続き口が少し開かれ舌が口内で前後した
喉が何かを飲み込み顎が連動する
そのあと眉間が少し寄り：アウリがゆっくりと目を覚ました

「あ…おはようございます」

「やだ…見てたんですか？涎、垂れてませんでした？」

まだ少し眠そうな雰囲気です話しつつ照れた様子で口角をなでる
出会った頃に比べて随分表情が豊かに、明るくなったと思う

「気持ちよさそうに寝てたよ、羨ましいくらい」

…もしかして、起こしちゃったかな」

「いえ…っ、そんな…そうだ」

「今度、お昼寝二緒にいかがですか？」

「良い陽気の日にも…なんて」

照れの混じった上目遣いの提案、かわいい

「うん、しばらくしてないし、やってみようかな」

「はい！約束ですよ？いつも遅くまで起きてるみたいですし

偶にはしっかり寝てもらわないと！」

「あっ、これはアウリにやられたな…」

「いや、睡眠は足りてるんだよ？ほんと」

「ふふ、でもお昼寝は約束ですからね？」

「隣で目を閉じてるだけでもいいですから」

「アウリが涎垂らしてる所でも眺めてるかな」

「もう！」

睡眠は確かに足りている、しかし遅くまで起きてるのは
現在、部屋にベッドが一つしかないからで
つまり、アウリに対して遠慮を感じての行動でもある
アウリが家に来てから数日はソファで寝ていたが
彼女からベッドを共に使う事を提案されて承諾した
ベッドの広さは充分、
だけどやはり気恥ずかしさに勝てず、未だ慣れない



「あの……私を……負担に思ったり、至らない部分があれば……その時は遠慮せずに言ってくださいね……？」

「いや……そんな事思った事はないよ！全然！！」

アウリのおかげで助かった事ばかりで！

感謝してもらいたくないくらい！！」

「本当……ですか？」

その……私が起きた時、少し焦ってる様子でしたので……

失礼ですが……何かを隠す気配を感じてました……

きっと私に見せられない何か……隠し事があるのではと……」

それはもう焦ってた、隠し事してる

慌てて勃起のやまめ陰茎をズボンに押し込んだ後だったから

アウリと話してる最中、陰茎が張りを失い

その中に残っていた精液が漏れ出て

太ももを伝う感触に意識を奪われもした

「先ほど話してる最中も少々居心地悪そうで……」

気付かれてた

「やはり原因は私にあるのではないかと……」

当たっている、半分は

いや7割は自分が悪い、9割かな？……全部だな

「私に責が無いのでしたら……理由をお聞かせ願えますか？」

隠したものもお見せください、誓って他言はしません」

参った、頑固なアウリが出て来た

何も無いと言っても聞いてもらえないだろう

普段見られない妙な鋭さを発揮し

虚偽や誤魔化しを見抜いてしまう

参った

言えるわけがない

隠していたエロ本が母親に見つかった子供じゃないんだ

何せ隠したエロ本すら存在しない

母親がおそらく自慰に理解すら無い

免許証でも失くした事にするか？

今この思考をした時間内で答えられたはずの内容で

アウリが納得するとはとても思えない

「握る強さ、このくらいいいですか？
痛かったら言ってくださいね」

アウリの綺麗な肌が黒ずんだ陰茎に映えている
こちらを気遣い微笑みを見せる彼女が眩しくて
つい目を逸らしてしまう

「アウリも、手が疲れたらんっっ…」
亀頭に触れられ背筋が跳ねる

「はい、でもせっかく任せてもらえたんですから
出来るだけ頑張らせてください♡」



問い詰められた後、意を決してアウリの前に性器を晒した
アウリはこれを『男性が排尿に使うもの』として認識しており
裸の時に隠す事からそれを晒させた非礼を詫びた
それからアウリに説明した

・排尿に便利だがデメリットがあること
・好意を寄せる相手と暮らすと頻繁に硬く腫れること
・その相手に処理してもらうのが良いこと
好意を伝え、弱みを見せるのを恐れて自分で処理しようとした…
アウリはそれで納得してくれたようだった

「臭くないかな…汗もかいてるし」

「私は好きな匂いです、体が暖かくなるような」

「失礼しますね♥」

「…っ!？」

亀頭にキスされた…

「アウリっ!？」

「ぷるぷるしてた可愛かったのてつい…お嫌でした?」

「いやむしろ良かったって言うかすごく嬉しいでも

おしっこ出る所だし…」

「そういえばそうですね…でも今は出てませんし

それに、喜んでいただけたので」

ぴくっ

ちゅっ…

あつつくそつつ鈴口にアウリのファーストキス取られたツツ
いやそれ以前にアウリのファーストキスは鈴口で奪ったのだが…

「アウリ…唇を当てたまま手で棒をさすって…もらえるかな…」

「任せてください♥」

数分前まで寝ているアウリでオナニーして一喜一憂していたのに
今は亀頭を唇でつえばまれ手コキされあつつ鈴口を舌で舐められっ…
アウリが視線を合わせ、いたずらっぽく笑ってからまた目を伏せた
うう…信じて弱みを預けてるのに…なんて悪い子だ…

「アウリっ…っ、出る…っ、合図っ…治まる合図…口開けっ…っ」
射精の事を説明してなかった
しかしアウリは要望通り口を開き
出ると言われた合図を待ち受ける
良い子だ…なんでこんな素敵な子に嘘を…
素直に好意を伝えていれば…
然るべき段階を踏んで行為に至れたのではないか



「ごめんアウリっ…出るっ受け取れっ…っあっくあっ…」
アウリの少し不安げな顔、額に汗もわずかに浮いてる
それでも体勢は射精を受け止める形のままで…
彼女の口内に精を放つ、本日二度目の口内射精
何か違和感を覚えられたらどうしよう…でも今は
この最高の射精を…

「アウリっ好きだっ…」

アウリの胸が上下し暖かい吐息が射精中の亀頭を包む
大きな精液の固まりが尿道を昇り、アウリの口内に放たれた

「んっ……っ」

アウリが胸元を押さえ
喉にひっかかるものを飲み込むような様子を見せる
顎を上げ目を合わせ、笑顔を作る

「お疲れ様でした、苦しそうな声がありましたがお加減はいかがですか？」

「あ、ああ……だいぶよくなったよ……ありがとうアウリ……
その……」

「私も好きですよ」



人として、だろう

実際、彼女に対しお節介を焼いて

お人よしのそぶりを見せたわけで……

下心を抱いた今、彼女から向けられる信頼が痛い

勃起が治まり尿道に残っている精液が鈴口に向かう感覚

「あ……」

アウリが再び亀頭にキスをしてそれを舐め取る

やわらかくやさしい唇

「次も、その次も、気軽に私に頼ってくださいね？」

恥ずかしがらずに、ですよ

一緒に暮らしてるんですから、助け合わないと」

今すぐに彼女に謝罪し、然るべき批難を受けるべきだと思った

「あつ、あつ」

亀頭をカウパー濡れの細い指で捏ねられ脚が震える

「転ばないように気を付けてくださいね♡」

遠慮せず体重預けてくれていいですから」

身体を密着させて支えられている

やわらかい身体、温かい体温、良い匂いにする…

アウリの形の良い胸が押し当てられて二人の間で形を変える

本当の事は伝えられなかった
臆病で薄汚い自分が嫌になる

あれから1週間

これで通算4度目の手コキ

アウリはすっかりチンポの扱いに慣れていた

そのするどい観察眼や器量の良さ、それに

子供のようなお茶目ないたずら心が

彼女の持つ優しさを根底とした上で

雄を啼かせる為に注がれている

もはや魔性だ

おしこ

おしこ

おしこ

おしこ

さあ...

「汗、かいちゃってますね
苦しいのすぐに終わらせますから
もう少しの辛抱ですよ」

雄の弱い所を攻める為ではなく
明らかに射精を促す為の手の動き
堕とされる...

どさくさでアウリのふくよかな尻に指を食いこませ持ち上げる
「アウリっっっ」

「ん♡はい、しっかり握まってくださいね」
セックスしたい：アウリとセックス：
このお尻に打ち付けたい！

「今日はどうしますか？」のまま出すか
それとも...

「のっ飲んでっ」
「はい♡」

「昨日はティッシュに出して
アウリに量や色、匂いをチェックしてもらった
：尿道に残ってた精液は
ついでに味を見る為に舌で受けてもらったが

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡

目の前で膝立ちになったアウリの唇が亀頭にやさしく触れる
あれ以来お約束になったアウリのキス……
ちんぽばかりずるいだろ……
口にはまだ一回も貰ってないんだぞ

「アウリがいつもキスするから
最近はいつもより念入りに洗ってるんだけど
匂いとか、どうかな」

「良い匂いですよ、変わらず」

もちろん念入りになど洗っていない

アウリに雄の匂いになるべく多く与えたい
「じゃあ洗わない方がアウリの為になるかな」

「だーめ！綺麗に保つことは良いことです」

「アウリはどっちが好き？」

「……病気になるっても知りませんよ！」
怒られてしまった……



「……アウリ、出すよ……
いいって言うまで飲まずに口の中に貯めるんだ」
「はい♡」

目を合わせ、手をぎゅつと繋ぎ
開かれたアウリの口に精液を放つ
口を見て精を放ち
目を見て精を放つ
アウリを見る目は彼女に苦しそうに見えるだろうか

「アウリッツツ」
口を開けて精を受ける彼女は
握り合った手に力を込めて答える

出るっ
出るっ
出るっ出すっザーメン受け取れっ
俺のアウリっ
彼女とキスしたい……
マーキングした成果を確かに感じたい……

これ以上の関係の進め方がわからない……
今してる行為の真実を、彼女についた嘘を、
アウリは知った上でまだ信頼を置いてくれるだろうか……



「んっ♡ふ♡」
「深く呼吸して…胸の中を匂いでいっぱいにするんだ」
「んっ♡」

頬に手を当てたまま指で首をなでると
アウリはくすぐったそうにみじろいだ
…このまま押し倒したい…
ザーメン堪能してる雌だぞ…このまま交尾行けるだろ…
その後謝ってもアウリは許してくれる
アウリは許してくれる…

じつとりと濡れた繋いだ手
時折ぎゅっと握り返してきたアウリの指の動きに
はっと思考が引き戻された
飲んでいいと言われるのを素直に待っている…
小さな鼻息が陰茎に当たっていた
暖かい…

「アウリ…苦しい思いをして頑張つて出したんだ…
それはアウリの助けもあったの事だけど…
大切に味わって飲んでほしい…できるかな？」
アウリは小さくうなずいた
「ありがとぅ、飲んでいいよ」

こうして雄の欲望は、たつぷりと時間を掛けられて
彼女の体内に落ちていった



なんだか肌寒い
いつも早起きのアウリのぬくもりはともかく
胸元に布の重さを感じない違和感！

「あつっ」
亀頭に刺激を感じ、腰が跳ねる
射精した

「おはようございます♡」

「あつあつっっ」

出るっでるっ精液でるっ

目覚まし手コキの驚きもそのままに

立ち昇る快感に思わず顔を背ける

待て待て！何も取り繕えないっ

こんな無防備な射精した事ないっっ

「一緒に寝てるからでしようか！」

おやすみの間にも大きくなってるのを見かけたので

治めた方がいいのかと思い！

「一応、口で受けようとは思ったのですが…どうしましょう」

「お、おはようアウリ…」

「はい、おはようございます！」

その後、朝のは問題ない事を告げ
精液は飲んでもらった



「これは…結構恥ずかしいかな…
脚の力が抜けた時も危ないし……」

「ちよっと良い椅子なんかがあればいいんですけど…
今日はこれで、少し我慢してください♡」
いつもの挨拶、亀頭へのキスの後でアウリから提案があった

手コギされる日々が続く中で
アウリとの距離がかなり親密になってきた様に思う
このままでは完全に尻に敷かれる日もそう遠くない

「この間乳製品について調べていたんですけど♡
大きな牧場で搾りたてのミルクが飲める体験の紹介があって…
下に引く形なら腕も動かしやすく
液体も落ちやすいかになって思ったんです♡」
される側の尊厳……

しばし戸惑うも彼女の楽しそうな顔
その輝く瞳に圧されて承諾した
アウリにちんぽをしごかれ射精させられる暮らしの中で
自分の中に新たな性癖の扉が開かれつつあるのを感じる

「すごいですね♥いつも通り前に持ち上ろうとして
普段より固く感じますし
押さえる手に吸い付いてくるみたいです♥
裏側も親指で力も入れやすくて良いですね♥」

「あっ待っあああっっ」
「やばっやばいっちゃんこ持っでかれるっっ」
「駄目なこかれ方してるっっ」
「尊厳っ尊厳がザーメンに溶けていくっ」
「どうでしょう新しい試みの成果は出ていますか？」
「私は手ごたえを感じているのですが…」
「ひどく苦しそうな声が…」
「だっ大丈夫、ただっ…大分っ利く…からっっ」
「効果があるようで嬉しいです♥いつでも出していいですからね♥
牛さんもぎゅっ♥ぎゅっ♥ってされて
びゅ♥びゅーっ♥って出してみましたよ♥」
「待っアウリっそれやめっっ」



「袋がきゅっ♡と持ち上がったってかわいいですね♡
このままミルクたっぷり出しちゃいましょうか♡」

恥ずかしさで顔から火が出そうになる

このままチンポからザーメンを出すよりその方がいい

「あつっああつっ」

「あ♡どくっ♡ってしましたね♡」

「このままいっばいしぼっちゃいましょう♡」

射精のタイミングに合わせて

竿が根元から真下へしごき下るされる

素早く絞りだされる粘度の高い精液がその摩擦で尿道を焼く

外からも内からもちんぽが熱い

「すごい塊でたっぷり出てきましたね♡」

熱くて手がやけどしちゃうそうです♡

中に残ってるのも全部出しちゃいましょう♡

いきますよ♡」

射精後に敏感なちんぽ…さっきまでの調子でしごかれたら…

「まっ待ってあう」

ミルクしぼりを楽しむアウリにその声は届かなかった

「びゅっ♡びゅ」

「あああああああああッッッ」

もっ...

ドキ
ドキ...

アウリの軽い身体を
後ろから抱き抱えてソファに座る

ここまで身体を密着させた事はこれまでにない
アウリの体温がじんわりと体に染み込んでくる感覚...
良い匂いがする...

「あ、あの...これは...?」

「最近のアウリは僕の苦しんでる姿を見て
楽しんでるフシがあるね?」

「いいえ♥苦しい時間が少なくなるよう
なるべく手早く工夫をして...」

「乳しぼりに随分夢中だったようだけど?」

「それは...その...」

「これからアウリにはひとの弱い所を任せられてる自覚を
身をもって思い出して貰います」

「何を...するんですか?」

アウリが話す度に口から彼女の良い匂いと
さきほど飲んでもらったザーメン臭が薫る
うう...自然なスキンシップに潜ぎつけた...ちんぽ爆発しそう...

「あ……そこ」

前掛けをずらしインナー越しに
アウリの股間を指で持ち上げる
久しぶり……やっと君に届いたよ

「アウリのおしっこする所、ちゃんと綺麗に洗ってる？」

「あ、洗ってますよっ」

「いつも着てるその下着、洗ってないみたいだけど
おしっここの跡とか残ってない？雑菌とか湧いたら大変だよ？」

「そうなんですよ、この服っ……不思議で……」

全然♡汚れが見られ♡ないんですっ♡」

布の事を聞くようにしてアウリの尿道口辺りをなでる
股を弄られるアウリの細かな身じろぎが伝わってくる
「そっ……だ……なあ……じゃあちよっ……と……でおしっこして？」

「……♡」

尿道口をぐっと押しその後リズムよく優しく叩く

「汚れがつかない所、見てみたいなあ……」

「だめ♡だめですっ♡今♡おしっこでないですし……♡」

「だめかあ……じゃあ代わりに何してもらおうかな……」

「あ、そうだ……」

「？」

さわ……♡

ひゅ

「…見えますか？」

「ほんとだ、ぜんぜんよごれてない
きれいなままだね」

アウリの股から布が浮いている
その内側をアウリの恥丘越しに眺める
この角度だと性器は見えない

ただ…谷はその存在を確認できる

「アウリにも生えてたらやり返すのが簡単なのになあ…」

「そう…ですね♡」

私にもあれば♡気持ちがあわかった、あ♡かもしれません…」

無くていい、おかげでアウリにはこんなにも素敵な陰部がある
いつまでも撫でていたい…」

「ちようどこの辺りだね」

アウリのクリトリスに指を這わせる

「あ♡あの…♡」

「うん？」

「そこ…♡お風呂で洗った時にピリツツとなって…
それ以来怖くて……」

「…決まったね、アウリへの罰が」

「うう…」

うう…頭おかしくなりそう…俺は今何をしてるんだ…？



「っっっっっ」
「どうか、アウリ」

ん

んんんんん

「わかりません…」

「すぐつたいような…」

「お腹の下の方が震える感じで…」

「うーん、何か出そうな様子はある？」

「ない…ですね…」

「でもしつとりしてきてるし…」

「もう少し触り続けてみようか」

「はい…」

二人の体温で少し暑い

アウリの温かみを受ける胸元から腹部が蒸れている

アウリの身体からはいつもと違う汗の匂い…

濃い雌の香りが立ち上ってきている気がする

どこをどう触ると良いか

アウリと相談しつつ指を滑らせていく…

彼女の突起はすっかり存在を主張するようになり

大人しい様子を見せていたアウリは

喉から高く、甘い声を出すのが上手くなっていた

指にまわりつく液体の粘度も高くなった

それをまたアウリ自身に摺り込んでいく

アウリがグツと身体を預けてきて言う

「出そう…」です…怖い…

知らない何かが昇ってきて…来ます…っっっっっ

「……♡♡♡♡」
アウリの身体がこわばる

アウリの全身から力が抜け
その重みと震えを支えた
アウリの絶頂を受け止めてる…
幸せだ…

「出ま…した？」

整わない呼吸のまま
アウリが聞いてきた
律儀でいい子だ…

「…出ないけど、大変そうだね」

「はい…」

気の抜けた声、かわいい

「まあこれで許そうかな…」

大丈夫？アウリ、動ける？」

「あ…今はちよっと…力が…入りにくくて…」

「アウリがこんなにくっついてくれるのも珍しいし
しばらくこのままにいるのも悪くないな」

「あの…重く、ありませんか？」

「そう…実はずっと我慢してるんだ…」

「もう…いじわるですよ!!」

うう…ピロートークみたいだ…アウリ…

「アウリ…お願いがあるんだけど…」

「はい？」

「お顔が近いとなんだか恥ずかしいですね♡」
「アウリの可愛い笑顔が近くで見れて苦しさも和らぐよ」
「もう♡」

仰向けで脚をあげたアウリに覆い被さって…
アウリに性器同士を擦り合わせてもらっている
状況の異常さと快感で今にも射精しそうだ

力の入らないアウリを抱きあげてベッドに移動し
『お願い』を聞いてもらっている
先ほどの経験を踏まえて
アウリに腫れを収めてもらいたいと…
丁寧な動きを心掛ける為に
アウリの突起周りに触れた状態でと…

入る…あとちよつとで入る…
脚の力が抜けたフリでもすれば
もうセックスになる…
アウリの中でアウリに包まれて…
アウリの大事な所に精液撒ける…
子作りを知らないアウリに…

「確かに…最近手の動きが
激し過ぎました…」

「アウリが大丈夫なら
乳しぼりしてもいいからね」

「では今度我慢比べでもしましょうか♡」

「お…そうきたか…」

「ふふ♡」

「あ、アウリつつ先：擦れてっ」
「ん♥ごめんなさい♥これ
かたさがちようどよくて
すべりもっ♥♥♥」
「良いつて：アウリは苦しさとか：辛かったり、しない？」
「そうですね♥胸が高鳴って♥：呼吸も早くなるのですが
どうしてか：もっとしてきたい：心地良い気が…
ごめんなさい、わたしばかり♥」
性器への刺激の与え方をこんなに早く学習して…
更には雄のチンポをデイルド代わりに
オナニーを覚えさせてしまった…
なんてことを：ごめんアウリ…
きもちいい：精子漏れそう…
「いいよ、アウリが嬉しいそうで良かった
したくなったらいつでも貸すよ」
「ありがとうございます♥」
あ：好き好き…
えっちしたい：アウリ…
「出そう：アウリ…」
「あ♥飲みますか？♥」
「いや、下のくぼみに合わせて…」
「う…はい♥(ニ)ですね」
う…ごめん





出てる…精液出てる…
アウリのおまんこに…
何も知らないアウリのおまんこに…
罪深い精子流しこんでる…
額から汗が流れて落ち、アウリにかかる
「ふっ…くっ…」
射精に熱が入る…雌の膣口に射精する…遠い種付け
奥へ奥へと精液を流しこもうと尿道周りの筋肉が力強く収縮する
「どくどく大丈夫ですよ」
「ゆっくり呼吸してください」
優しい声、ちんぽに手を添えて膣口にあてがい
射精を受け止めている
知らぬままに子作りを…
うう…濃いのが出る…
金玉が悦んで精子製造工場
フル稼働させてる気がする
身体の体積全部
ザーメンに変換される…
「中に残ってるのも
出しちゃいますね」
アウリの手が動く
あ、だめだアウリそんなことしちゃ…
危険な精子が…出…出る…アウリつつ

「っ♡ふん♡」

亀頭の筆によりアウリの性器に
精液が延ばされ、塗りこまれていく

アウリにオナニーを続けてもらっている
終わった後に疲れて力が入らなくなるからと
断られそうになったが

良く感じるようになった機会だからと薦めた
今は夢中で自慰にふけっている

「気持ちいい？アウリ」

「はい♡気持ちいいです♡」

「どうすると良いの？教えて」

「あ♡この♡きれいな…色の違うところを
ぬるぬるで♡すり♡合わせると…♡」

「泥遊びが好きな子供みたいだね」

「そう♡かもしれないね♡」

かわいい

「かわいいよアウリ」

「なんだか恥ずかし♡」

来ます♡アレ♡また♡」

アウリの様子に陰茎が硬さを取り戻す

「あ♡また固くなっ♡あ♡ん♡」

アウリの身体の震えが亀頭から伝わってきた

もう我慢出来なかった
今日、もう、このままセックスする！
アウリと繋がって、アウリの中に中出しする！

「あの……目が……怖いです……」

「私、なにか変ですか？」

「いや……アウリと僕の……」

「こんなにも違うものなんだな……って」

「そう…ですね私は好きですよ♡」

それ…固い時も柔らかい時も」

「アウリ」のも瑞々しい果物みたいで

「美味しそうだよ」

「…きっと食べても」

「美味しくありませんよ？」

「どうかな…アウリは

僕のミルクいつも飲んでるだろう？

美味しくなくても気に入るかも」

「味見してみます？不味くても」

「落ち込まないでくださいね？」

「美味しくてびっくりするかも」

「ないです！」



とて
てき
てき



A close-up of a character's eye, which is a vibrant green color with a yellow gem-like center. The eye is framed by light blue, crystalline structures that resemble ice or a futuristic helmet. The character has light blue hair.

「それで……あの……」の各号で見

「それで……あの……この格好で見る
貫つないのぢやありませんか？」

慣れないので、やはり違和感がある。でも、しばらくその夫と今か

「うん、しはらくそのまま…今か」

「入れる……？ 私に？ それを……ど

する……セックス……このまま……

「待つ♥あぁっ♥♥♥」

「アウリッツツ」あっ入ったっつっつ
セックスーアウリとセックスしてるっ!!

うっでるっちんば爆発する…

おんなのこのなかに

白いおしっこお漏らししちゃう…

「うっ♥♥♥♥♥」

耐えてる…体験を受け入れてる…

必死に状況を飲み込もうとしている…

ちんぽから伝わる彼女の震えが愛おしい

頑張れ…頑張れアウリ…

「は…入りました、ね…」

「ごめんね、急に…痛かった?」

「はい…中?が広げられた時が…」

まだ…胸の震えが収まりません…

…でもどうしたんですか?急に…

寂しくなっただんですか?」

「え?」

「だめですよ♥どうしてもくっつきたくなくても
ちゃんと相手の事を考えないと…」

アウリの体験や知識の中から今の状況を分析した結果…
不安や孤独感から他者を求めた動きという事になったのだろう
「そうだね…ごめんアウリ…ずっと繋がりがかった」
「私もです♥お互い素直になれましたね♥」

ぎゅっ

みずいっ





アウリの中に射精する
精液を撃ちだし…流し込み

…放ち…注ぎ…撒く

アウリにぎゅつと包まれ

多幸福感を感じながら

陰茎の脈動を伝えていく

「ふっ…うう…っ」

種付けしてる…アウリに…

「…でてますね♡」

うん…出してる…

「美味しい？」

「味なんて……そうですね…

…とっても美味しいです♡♡♡」

うう…幸せだ…結婚しよ…

「結婚しようアウリ」

あ…やば…

「はい♡私もあなたときちんと

家族になりたいと思っていました♡」

えっ…あっ…うう…

「アウリ…」

「はい♡」

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

はい♡

「あ♡待ってください♡♡♡
なん♡♡♡で♡」

硬さを取り戻した陰茎を
アウリの中から引き抜いた
雄を受け入れた事で
拡げられたアウリの雌
抜かれた陰茎を追うように
粘度の高い精液がこぼれ出る
二人の間に
獣臭のする湿度の高い空間が出来た
いやらしい…

「アウリ…その…」

また…お願いなんだけど…」

「内容に寄ります♡おしっこはダメです」

「あ、いや…その…」

アウリに言っただけ…

コレで…どうされたいかを…」

「どうされたいか…いいですよ♡」

「これからそれをまた私の中に入れて…
身体がふわっ♡として力が抜けるまで擦ってください♡」

「……うん」

要求が性急過ぎた

「何か至らなかつた様子ですが…」

「かわいいアウリが見れて良かったよ！」

いぢゅ! いぢゅ!

「は♡あ♡♡♡♡♡」

アウリの脚を抑えつけ
突き上がったおまんこに
ちんぽを出し入れする

「これ♡おなかのうら当たって♡♡♡」

だめ♡腰逃げられませ♡ん♡♡♡♡♡」

「入口締め付け弱くなってるよアウリ
自分ばかり気持ちよくなってるぞいなあ」

「そんな♡なら、おなかごしごし♡♡♡」

やめて♡くださ♡♡♡♡♡」

「余裕ないアウリが可愛くてやめられないな
ほらほらアウリ頑張って、ふわっとするの来ちゃうぞ」

「ああも♡う♡あとで♡ひどいですからね♡♡♡♡♡」



はちゅっ はちゅっ!

ぎゅっ...

はっ...っ

はっ...

「あ♡あの...っ♡」
「ん?なに?アウリ」
「なか♡かたくて...まだ♡
出そうですか?♡♡」
「うん、出せるよ」
「私♡そろそろ来そう♡で♡そうしたら...あ♡」
「大丈夫、気にせず気持ちよくなっていよ」
「でも♡あっ♡待っ♡やめ♡来ちゃ♡♡」
「じゃあ出すまで頑張れるかな?」
「あ♡そんなっ♡できませ♡♡」
「出すよアウリ、アウリのお腹の奥に」
「はい♡出してください♡びゅっ♡♡
どっどっしてくだい♡♡♡♡♡」

どく...!!
びく...!!
びく...!!

くっ...
くっ...
くっ...

あっ...

はっ...
くっ...
くっ...

イってる...アウリが...
射精受け止めながら...
子作り知らないまま
えっちの気持ちさに
夢中になる...
ずるい雄の精液受け入れて...
無防備に絶頂晒してる...
出す...精液全部だす...

「っ...っ...」

腰を押し付けるのに合わせてアウリが呻く

「ごめん、苦しかった?」

「大♥丈夫です♥お残しなく、だしてくださいね♥」

「うん、お、お...っ」

力みで出せていなかった残りの精液が流れ出て、性感を刺激した

「あ♥ああっ♥」

「アウリ、落ち着いて…ゆっくり呼吸して」

「でき♥ませっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

たっぷりと惜しまれながら

アウリからちんぽを引き抜いた

膣外の空気を感じてス〜ス〜する

「あ…なんだか空気が冷たく…」

「同じ事考えてた、まだ入れておく？」

「っ♥…終わりがなくなってしまいますよ？」

「それはたしかに…」

と…

すっ

「…アウリがしたくなった時はいつでも言ってね」

「ですが…それが大きくなるのは…」

「…アウリの助けが必要だけど方法はあるんだ」

「では♥その時に♥」

結局、本当の事をアウリに伝える事が出来なかった

それどころか新しい嘘を重ねる始末…

今回の妊娠した場合…どうしよう…

いつアウリが子供のでき方に興味を持つかもわからない

男女の違いに疑問を持ったり行為について調べられてもまずい…

なるべく早く謝らなきゃ…

なるべく早く…



























































































